

THE FULBRIGHTER

IN

CHUBU

No. 5

February 1995

CHUBU GARIOA/Fulbright

Alumni Association

目 次

巻頭言

「脱欧米、入亜」か?.....千田 純一..... 1

ゲスト・スピーチ

日系ブラジル人の

アイデンティティー危機Gretchen L. Richter..... 3

報 告

1. 総会記録 11

2. 平成5年度決算および平成6年度予算 12

3. 例会記録 13

事務局だより 14

編集後記 16

巻頭言

「脱欧米、入亜」か？

千田 純一

毎年、年末から年始にかけて海外の友人、知人、卒業生などからグリーティングカードをいただくが、今年の特徴はアジアに滞在中の卒業生から多くいただいたということである。それだけ日本企業のアジア進出が盛んであるということ、実感した次第である。

実際、今年の新年の新聞は、アジアと日本の関係に注目した特集が目立った。円高の進行によるコスト・アップに耐えかねて、日本企業が賃金・地代などが安く、また将来の市場として有望な東アジアに大挙して工場や事務所を移していることはよく知られている。それは、少なくとも短期的には日本の「空洞化」として現れることは否定できないところである。しかし、長期的には新しい分業・貿易関係に基づく新経済圏が形成され、日本がその中で発展を続けることができれば、一時的な「空洞化」はさほど心配することもないかもしれない。

それはともかく、最近のアジア・ブームが「脱欧米、入亜」を意味しているとするれば、問題であろう。欧米の経済・社会に学ぶべきものがまだまだたくさんあると思われるからである。

たとえば、証券市場のことを例にとると、取引の透明性、開放性に基づいて効率的で公正な証券市場を維持していくという点で、日本は欧米に比べて見劣りがする。企業の十分な情報開示と投資家の自己責任原則が欠けており、そのため当局の種々の保護・制限規制のもとでお互いにもたれあっているというのが、日本の証券市場、証券取引の特徴である

といわざるをえない。アメリカが長い間、十分な情報開示の下で自己責任原則で資金調達・資金運用が行われるようなシステムをつくるために払ってきた努力に日本は学ばねばならない。

また、今問題になっている規制緩和にしても、肝心の消費者からの支持が弱い、その背後には、製造物責任法を巡る議論の過程で明らかになったように、日本では商品に関する情報を積極的に開示する（あるいは開示させる）仕組みがなく、また損害が発生した場合、それを立証する負担が消費者の側にあり、容易に被害を回復することができないという問題があるようである。したがって、消費者はむしろ当局の保護・規制に頼ることになっているといわれる。規制緩和によって消費者が安価な商品を選択できるようになるには、例えばアメリカの消費者保護法に学ぶべき点が多いのではなかろうか。

以上はほんの一例に過ぎないが、要するに日本は欧米のシステムに学ぶべき点が多々あるのであり、それを忘れて、優越感を持ってアジアの国と付き合うのは愚かなことである。最近のアジア・ブームがそのようなことを意味するものではないことを願う次第である。(1995/1/19記)

(中部同窓会副会長、名古屋大学)

ゲスト・スピーチ

日系ブラジル人のアイデンティティ危機

G r e t c h e n L . R i c h t e r

はじめに

最近、国際的な相互依存関係の形成が進められ、異文化間のコミュニケーションが重視されるようになってきた。アメリカのような移民の国では、この異文化間コミュニケーションは国際問題だけではなく、国内問題でもある。アメリカでは多くの人々がそれぞれ違う文化を持っているので、お互いに理解するためにも多文化主義(multiculturalism)を重視せざるをえないのである。

日本の文化的・人種的・社会的な均質性を考えると、多文化主義は日本とは関係がないという見方がある。しかし、日本人が従事したがいらない、汚い・きつい・危険な仕事、いわゆる3K労働をするために、最近多くの外国人労働者が日本へ来るようになった。日本の政府と人々は自分の国で異文化間のコミュニケーションを考えなければならない状況に直面しつつあるといえる。今後も、外国人が増加し続けることが考えられるので、社会的な問題が生じるように、やはり日本でも多文化主義を重視することが求められているといえる。

筆者の知っている外国人のあるグループは、ブラジルから来た日系人から構成されている。この論文は特にその人達のアイデンティティ危機についての報告を試みる。

日本の政府は、日系人は他の外国人よりも日本の生活に容易に適應することができると考え、日系人が日本で簡単に働くことができるような法律を作り公布した。筆者は日系ブラジル人の生活を実地に考察し、この考え方が正しくないという結論に達した。

日系ブラジル人のほとんどは、日本に適應することができないでいる。彼らはブラジルの日本人植民団の出身であるが、多くの人は日本よりもブラジル文化の特性を持っている。例えば、多くの日系ブラジル人は日本語を話せず日本料理は口に合わないと感じている。しかし、日本人は日系人には日本の血が流れているから日本の習慣と伝統にすぐ適應できるのではないかと考えている。日系ブラジル人にとって、この期待のプレッシャーは大変なものである。

日系ブラジル人は、ブラジルでは「日本人」と呼ばれ、日本では「ブラジル人」と呼ばれている。その上、日本では文化的な期待もある。彼らはブラジルでも日本でも社会的・国家的・文化的なアイデンティティが安定していない。来日後、アイデンティティの危機に直面しているのではないかとと思われる事実が多々現れている。

本論文は筆者の日系ブラジル人研究の第一歩となるものである。又、ここで日系ブラジル人のアイデンティティ危機を分析し、彼らのアイデンティティ危機の実態を正しく理解することが、ひいては、日本の政府と人々が、日系人の問題を異文化間のコミュニケーションの問題に位置づけ、相互理解を進める第一歩になると思われる。

筆者は1992年から日系ブラジル人についての研究を開始し、1992年の10月から1993年の7月まで、ブラジルでフィールドワークを行った。ブラジル滞在中、筆者はある日系人の植民団へ行って、日

本から来たお年寄りの移民や日系ブラジル人のリーダー及び日系人の大学生、さらには最近日本から帰って来た「出稼ぎ」労働者に対してインタビューを進めた。また、ホームステイも経験した。この他に、筆者はサンパウロ市の日系ブラジル人研究センターの図書館で様々な調査報告を読み、日本の移民博物館で歴史を学習した。

筆者はブラジルにおける研究活動を基礎に、さらに日本で日系ブラジル人の実態を調べるために1993年9月に来日した。同年9月から12月までいろいろな日系ブラジル人を支援する団体や社会教育センターの日本語教室、さらには多くの日系人が住んでいる町へ出かけ、情報を収集した。1994年1月23日から2月28日まで、愛知県豊田市、名古屋市、群馬県前橋市、大泉市と東京都で日系ブラジル人に対するインタビュー調査を実施した。それに加えて、同じ研究をしている名古屋大学留学生ヘジーナ・ミヤザカがインタビュー取材した資料も分析の対象とした。

本論文は、ブラジルと日本の両国で集められた資料を使って執筆されたものである。

1. 歴史

日系ブラジル人の問題をよく理解していただくために、まずここで日本からブラジルへの移民の歴史について簡単に触れておきたいと思う。

日本人が始めてブラジルへ移住したのは1908年のことである。日本には colonization companies (移民送りだし会社(機関))があり、ブラジル政府とコーヒー農家が共同で移民受け入れの計画を立て、移民した日本人はコーヒー農場の契約労働者になった。多くの日本人移民た

ちは出稼ぎ目的であり、ブラジルに定住する意志は当初持っていなかった。しかし大多数の日本人がブラジルに定住することになった。

当時、ブラジルの政府は西のジャングルを開墾し、生産的な農場にしたいと考えていた。そこで、移民送り出し会社は農業地域にするという約束をすることで、ブラジルの政府からサンパウロ州、パラナ州、パラ州にまたがる広大な土地を譲り受けることになった。移民送り出し会社は日本の田舎に農地があまりないことに目をつけ、農村の家庭にブラジルへの移民を宣伝した。このようにしてブラジルと日本との「Dekasegi Legacy」（日本語に訳せば「出稼ぎ伝説」）が始まったのである。

日本からブラジルへの移民は、大変よく計画されたものであった。植民団の土地は個人ではなく家族に対して与えられた。植民団を日本の村らしくするために、移民送り出し会社と移民たちは農協や文化市民会館、それに日本語学校や病院を建てた。

このようにして、一般には起こりやすい移民問題を避け、日本の文化を保存することができた。この植民団は、今日まで続いており、日系ブラジル人の生活には日本的な習慣と伝統を見ることができる。例えば、教育はとても重視されており、日系ブラジル人のうち約75%は大学へ進学している。彼らは勤勉で自分の家族や集団の和を大切にしており、日本語学校や文化市民会館でたくさんの日本の祭りや活動（例えば運動会）を行っている。しかし、多くの日系人は昔の日本のことはよく理解しているが、おそらく日本語と現在の日本のことはよく理解できていないと思われる。

近年、ブラジルの経済状況はとても悪化しており、多くの日系人たちは、自分の祖父がブラジルへ行ったのと同じように、日本に働きに出て

行く。現在の日系ブラジル人出稼ぎ労働者たちは、日本とブラジルの「Dekasegi Legacy」を続けているといえる。

2. 日系ブラジル人のアイデンティティ危機の特性

私とヘジーナ・ミヤザカは合計39人の日系ブラジル人にインタビューを行った。このインタビューから、日系ブラジル人のアイデンティティ危機には7つの特性があることがわかった。

第1： ブラジルの日系人植民団について

もし日系人が植民団の出身であればその人たちは日本的な文化を持っているのではないかと考えられる。インタビューした人の中で25人が植民団の出身であった。彼らは植民団の市民文化協会の活動では司会をしていたし、日本の伝統も大事にしている。しかし、多くの人は「私はブラジルでは日本人、日本ではブラジル人です」と言っている。

多くの日系人は祖父や父から日本についての話を聞いていたので日本に関して期待を持って来日している。しかし、現実の日本は、彼らが聞いた話の中の日本と同じではなかった。そのような印象をうけて、日本にいる日系人たちは「私のアイデンティティとは何なのだろうか」と考えざるをえなくなっている。

第2： 日系ブラジル人の日本語について

日系ブラジル人の大半は日本語の読み書きや会話ができない状態のまま日本に来ている。インタビューをした日系ブラジル人のうち、約半分はブラジルで日本語を勉強した経験を持っていた。けれども、多くの日系ブラジル人が彼らの祖父母から日本語を学んだ為、現在の日本語とは違ったものになっているが、彼らはそのような言葉をよく使う。その上、

敬語も正しくは使えないのである。

そのため、インタビューした人の半分は日本で日本語を勉強しているという現状であった。もちろん、よく頑張って日本語が上手になった人もいる。多くの人は仕事に関する単語と生活に必要な日本語しか理解できないのが普通である。

多くの日系人が日本に来て最も困ることは、日本語ができるかできないかという問題が、すぐアイデンティティの問題にぶつかるということである。日本語ができないと普通の日本の社会に入ることは難しい。日本語ができなければ日本の文化的アイデンティティを持ってないと思われる。

第3： ブラジルの見方について

たくさんの日系人は日本で生活して、初めて自分の国を外から見ることになり、ブラジルについての考え方が変わったと答えている。アイデンティティについて、この新しく生まれた考え方は大切なものだと思う。彼らは、日本に来ることで初めてブラジルの文化をさらに知ろうとするのであり、そこから自分のアイデンティティをも見直して、日本にいる間に自分のアイデンティティはブラジル人的なものであることを発見するのである。

第4： 日本についての意見

前に説明したように、日系人は日本に対して、好意的な期待を持っている。しかし、インタビューした人々のうち10人は、現在の日本と以前自分が持っていた期待とはとても違っていると答えている。そして、多くの人は実際に日本に来ると現在の日本の生活や文化や社会があまり好きではなくて、慣れることもできないことを発見する。日本に定住する予定

の人は39人中3人しかいなかった。このことから日系ブラジル人は日本にいる間に、自分のアイデンティティを変化させていることが分かる。

第5： 日本人からの文化的な期待について

ブラジルから来た日系人の容姿は日本人と同じであるため、日本人から彼らを見ると、日本語や日本の文化及び日本的な人間関係を自然に理解できるだろうと考えられがちである。例えば、駅の中で日系人たちが電車の時刻や乗り場、又、切符の値段を日本人に聞いても、「変な人」という顔をされて、手助けを受けることはほとんどない。日本人にしてみれば、「なぜあの人は読めないのか」と不思議なのだと言う。

会社の中でも、日系人に対する文化的な期待がある。日本人は言葉を使わないでコミュニケーションをすることが多い。日系人は、このようなコミュニケーションは全く理解できないが、日本人の側からは分かるだろうと言う期待がかけられている。

もちろん、多くの日系人はこのような日本人からの期待には答えられない。彼らは、それまでブラジルで生活していたので日本のことを自然には理解できない。日系人はこうしたアクシデントに出会うことで、彼らの文化的アイデンティティを考え直しているのである。

第6： 日本人の日系人に対する差別について

さらに、日系人は差別もよく経験する。筆者がインタビューした人によると、例えばデパートに入ると館内放送で「ブラジル人が買い物に来たから、売り場をしっかりと見張りなさい」という知らせが流され、あるいは警備員が日系ブラジル人の後ろをついたりすると言う。会社での不満も耳にする。もし会社でトラブルがあれば、他の社員たちは「日系

人のせいだ」と言うのだ。

差別があれば、もちろん日系人たちは自分のアイデンティティを振り返り、ブラジルの方を選ぶのである。

第7： 日本の文化に関連すること

今までの6つの特徴を見直すと、日系人はブラジル人に近い文化的アイデンティティを持っていると言う結論が導かれる。しかし多くの日系人は自分が日本の文化と結び付いていることを知っている。日本で生活することで伝統や習慣も習うことができる。現在日本を好きではなくても、伝統的な日本文化を大切に自分の子供たちに伝えていきたいと言う人がたくさんいたのも事実なのである。

多くの日系人は、自分の中に日本人とブラジル人の両方の特性を見いだしている。ある女性はそれを次のように説明してくれた：「私たち日系人はとてもラッキーだと思います。二つの文化を持っていますから日本のいいこととブラジルのいいことを選んで、自分の個性を作ることができるのです。」
(中部同窓会総会、1994年6月3日)

ゲスト紹介：Ms. Gretchen L. Richter

昨年度Recent B.A. (現在のFulbright Fellows) Program の奨学生として名古屋大学に籍を置き研究活動。尚、上記内容は総会でのスピーチ後研究を重ね、中部同窓会会長(南山大学外国語学部教授)岩野 一郎氏担当の講義で講演したものを掲載。

報 告

1. 総会記録

平成6年度の中部同窓会総会は、6月3日午後6時30分から名古屋アメリカン・センターの会議室で、会員約20名の出席を得て開催された。

はじめに、会長の挨拶とゲストの紹介があり、ついで総会議長に千田純一氏を選出して議事を進めた。議事の内容は以下の通りである。

1. 平成5年度事業報告の件：ガリオア・フルブライト中部同窓会総会の開催(平成5年5月14日)、例会の開催(平成5年12月10日)、会員名簿・NEWSLETTERの発行、Recent B.A. (現在のFulbright Fellows)の受入
2. 平成5年度(平成5年4月-平成6年3月)決算報告ならびに監査報告の件：別記の通り承認された。
3. 平成6年度事業計画案の件：総会・例会の開催、会員名簿・NEWSLETTERの発行の計画につき説明があり、承認された。
4. 平成6年度予算案の件：別記の原案通り、承認された。
5. 同窓会活性化の件：様々な意見が交換され、今後も各自検討していくことで一致した。

総会終了後、日米教育委員会前事務局長、カロライン A. 又野 ヤンさんにゲストスピーチ(今後のフルブライト同窓会の在り方や、ご本人のこれまでのご経験等)をいただき、活発な質疑応答があった。引き続き懇親会に移り、ゲストを交えてビールを飲みながら歓談し、散会した。

2. 平成5年度決算および平成6年度予算案

平成5年度決算 (1993. 4~1994. 3)

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	516,170		役員会諸費	35,840	開催費他
金利収入	7,599		総会諸費	95,142	〃
年会費	241,000	77名+	例会諸費	142,590	〃
		賛助会員1名分	名簿作成費	28,263	
総会会費	30,000	15名分	Newsletter	57,721	
例会会費	18,000	9名分	その他	5,740	郵便費等
図書売上	2,440		次期繰越	449,913	
合計	815,209		合計	815,209	

平成6年度予算 (1994. 4~1995. 3)

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	449,913		役員会諸費	45,000	開催費他
金利収入	6,239		総会諸費	85,000	〃
年会費	240,000	80名分	例会諸費	85,000	〃
総会・			名簿作成費	50,000	160部
例会会費100,000	50名分		Newsletter	50,000	160部
			予備費	481,152	
合計	796,152		合計	796,152	

3. 例会記録

平成6年度の中窓会例会は、10月20日午後6時30分から名古屋アメリカン・センターの会議室で、総勢約30名の出席を得て開催された。

はじめに、会長の挨拶とゲスト（日米教育委員会新事務局長、Mr. Samuel Shepherd）の紹介があり、続いてゲスト・スピーチをいただいた。

又、Fulbright 講師・Mr. John Dominguez 夫妻とFulbright Fellows 3名（Mr. Jon D. Duke, Mr. Matthew D. Metzger, Ms. Ann M. Fox）も、お招きした。（下線「事務局だより」参照）それぞれ自己紹介をいただき、会は和やかなムードで進んだ。引き続き懇親会に移り、歓談し散会した。

又、今回はシェパード氏の発案により同窓会員ではない中部圏在住フルブライターにも案内を発送したところ、11名の方が参加し、当日欠席の方も含めて13名の方が入会を希望した。

この事は今年度総会でも討議された同窓会活性化への手掛かりになると思われる。

<事務局だより>

厳しい寒さが続き、暖かい春が待たれる季節となりました。今年度も無事にニューズレターを発行できたことを嬉しく思います。

今年度は例会時より13名の方が新しく当同窓会に参加して下さることになり、さらに充実した会になる事と思われます。又、3名の方がFulbright Fellows Programで来名しました。例会でゲストとしてお迎えした際、親睦を深められた方も多いたと思いますが、当日参加されなかった方々へこの場をお借りしてこの3名をご紹介しますと思います。

● Mr. Jon D. Duke ●

アトランタ生まれ。Emory Universityに在籍中であり、Harvard Medical Schoolの学生でもある。専攻は歴史であり、現在名古屋大学に籍を置いて東アジアの歴史について研究している。

● Mr. Matthew D. Metzger ●

サンフランシスコ生まれ。Princeton Universityの卒業生で学生時代の専攻は比較文学と東アジア研究。現在南山大学文学部に籍を置き、美濃部・ハイジック両教授の指導のもと比較文学（特に平家物語）を研究している。

● Ms. Ann M. Fox ●

ワイオミング州ララミー生まれ。Hampshire Collegeの卒業生で学生時代の専攻は哲学。現在Mr. Matthew D. Metzgerと同じく南山大学文学部に籍を置き、美濃部・ハイジック両教授の指導のもと日本哲学を研究している。

在名中、同窓会としてこの3名の方に出来る限りお手伝いをしたいと思っておりますが、何かアドバイスのおありの方は直接3人とコンタクトをお取りください。住所は次のとおりです。

・ Mr. Jon D. Duke

〒464 名古屋市千種区鹿子町7-46 鹿の子エイト103号

TEL 052-781-6196

・ Mr. Matthew D. Metzger

〒466 名古屋市昭和区八雲町74 南山大学交流会館102号

TEL 052-834-6568 (#102)

・ Ms. Ann M. Fox

〒466 名古屋市昭和区八雲町74 南山大学交流会館104号

TEL 052-834-6568 (#104)

一年会費の納入について

当同窓会は、皆様の会費によって運営されています。本年度分の会費納入がまだお済みでない方は、お送りした振込用紙をお使い頂くか、または下記の口座まで3,000円をご入金下さいますようお願い致します。

旧振込用紙使用

「名古屋1-56942 ガリオア・フルブライト中部同窓会」

新振込用紙使用

「00810-3-56942 ガリオア・フルブライト中部同窓会」

一住所・勤務先等の変更について

事務局では常時会員の皆様からのご連絡をお待ちしています。会員名簿、ニューズレター等を皆様のお手元に間違いなくお届けするためにも、名簿に記載されている事項に訂正、変更、追加等ございましたら、すみやかに事務局までお知らせください。

編集後記

ガリオア・フルブライト中部同窓会のニュース・レター、第5号をお届けします。第4号発行後、早いもので1年3ヶ月が経過しました。少々発行が遅くなりましたことをお詫び申し上げます。

この間、同窓会では平成6年度の総会と例会を各1回開催し、ゲスト・スピーカーのお話をうかがって勉強するとともに、会員相互の親睦を深める事が出来ました。今後も、総会・例会の開催、ニュースレターの発行などを行ってまいりますので、会員の皆様の積極的な参加をお願い申し上げます。同窓会への要望なども、ご遠慮なくお寄せください。

最後になりましたが、ニュースレターの発行など同窓会の事務につき、事務局にお世話になりました事を付記し、謝意を表する次第です。

(編集世話人 千田純一)

発行年月日 1995年2月7日
発行者 ガリオア・フルブライト中部同窓会
〒466 名古屋市昭和区山里町1-8
南山大学アメリカ研究センター内
電話 052-832-3111 (内線567)